

Mark Twain: *What Is Man?* における Adam と “God”

那 須 頼 雅

1

His world toppled in ruins round him, all the bases of his belief were called into question, and his talent was so impaired that for a long time it seemed to have been destroyed. When at last it was integrated again there is no longer to be seen the Mark Twain who had had a coherent development up to *A Connecticut Yankee*. There is a new Mark Twain, the author of *What Is Man?* and *The Mysterious Stranger*.¹

これは Bernard DeVoto の生み出した晩年の Mark Twain 像である。この像はそれ以後、半世紀余にわたってさしたる手直しがなされないまま、長く、広く批評界に腰を据えることとなった。しかし、そういう一般の流れの中にありながら、その像の歪みを鋭く見抜いて、その修正を強く世に訴えたのが Theodore Dreiser であった。Dreiser は Twain の晩年をおそった数々の思いがけない不幸な事件、そしてこの老作家の周囲に渦まいた数々の忌まわしい社会的事件などに大きくとらわれないで、ただひたすら Twain の後期作品、たとえば *The Mysterious Stranger*, *What Is Man?* *A Double-barrelled Detective Story*, *King Leopold's Soliloquy*, *Eve's Diary*, *Christian Science*, *The Man That Corrupted Hadleyburg*, *Captain Stormfield's Visit To Heaven* などを丹念に渉猟して、Twain の真髓に触れようとつとめた。

つまり Dreiser は Twain の中に時代を超越する深遠な思想家をみとめた。彼は晩年の Twain を “a psychologic as well as literary enigma”² だと目し、それだけに一層アメリカにおける Twain 批評の修正をうながしつつ、次のように述べている。

...by no means has Mark Twain been properly evaluated. In America, as it is intellectually running even at this time, I doubt if he can be ...³

この Dreiser より大きく時代は遅れるが、DeVoto の Twain 像の手直しの面で大きな功績に輝くのが John S. Tuckey である。Tuckey は彼の優れた論文, “Mark Twain’s Later Dialogue: The ‘Me’ and the Machine” の書き出しから、その批評の流れの変化を次のように指摘した。

Although the last period of Samuel L. Clemens’s literary work has been regarded as one of despair, there has recently been an increasing recognition of complexities in the later writing.⁴

そして Tuckey は、Twain が晩年に悲観と絶望の淵に追いこまれ、両手で頭をかかえこむ追然たる像をおろし、それとはまさにうらはらの老いて益々意気衝天の作家像、Twain の戦う姿にライトをあてて、人びとの注意を喚起した。

I believe it can be shown that Clemens was still fighting during those late years that have often been considered his time hopeless resignation. And, since a number of the later works can now be dated with some accuracy, it seems possible to consider more or less sequentially some phases of the battle.⁵

この小論は、こういった Dreiser, Tuckey の流れに副った Twain 再評価のひとつの試みであるが、Dreiser の Twain を「不可解な作家」(enigma)

とみる見方を下敷きにし、Tuckey の「駁う作家」としての Twain 観をさらに押し進め、晩年の Twain の中に戦いの勝敗といった人間界の些事すべてを超越し、彼独特の人生哲理を確信に満ちて説く「救世者」の姿をみとめようとするものである。ここではとくに、先の DeVoto の手で晩年の Twain がつくりあげられる際に、その有力な証拠のひとつとしてもちだされた作品 *What Is Man?* を中心に据え、さらに最近になってようやく日の目を見た *Mark Twain Papers* に含まれる数々の資料および、尚未刊の彼の *Notebook* などを拠り所に、この「救世者」Twain を明らかにしていく。

2

What Is Man? の細い検討に入っていく前に、まずこの作品の全体像、全体的性格についてふれておく必要がある。

What Is Man? は従来批評家たちに、その題名の疑問符のせい、道に迷った懐疑的老作家 Twain をいたずらに印象づけたようだし、また、そこに打ち出されている「人間機械論」の論旨が、余りにも率直明快であるために、この老作家の悲観・憂鬱だけをとくに際立たせたように思われる。しかしながら、この小説はそういった印象が生みだすような人間破壊の書でもなければ、世の乱倫、乱雲をねらった悪魔の書でもない。いやそれどころか、その反対であり、それは真に人間の無力、無気力を憂い、世の腐敗に激怒しての新しい人間造り、世直しをこそ、その基本的なねらいとした作品なのだ。

さて、Twain の identity はといえば、それは「二重構造」(duality) であるといえよう。Twain は、人間および人間世界のあらゆる面に、この「二重構造」をみとめ、それを大胆に誇張して写し出すことを自らの作家使命であると考えた。そして、その完璧を期すために Twain は先ず自らをその「二重構造」の体現者たらんと心がけた。このことは彼が、*Innocents Abroad* の前置きで、自らの “impartial eyes” を力説する言葉をさしはさむことによって、その逆の partial eyes を自らのものとしてあわせもつことを暗に示

していること、また、*Huckleberry Finn* の冒頭の作者の自己紹介において、“he told the truth, mainly.”⁶ という表現を用いて、おおむね “the truth” を語ると同時に、the untruth をも時折り口にすることもあるとおわせていること、またさらには、*The Extraordinary Twins* の序言⁷ で Twain は自らを “jack-leg” だと自嘲的に自称しながらも、“born-and-trained novelists” という別の面をのぞかせるということなどによって明らかである。この「二重構造」は、彼の作品の中では一層明瞭にうきたっている。彼が作品に登場させる人物はといえば、「明」の Tom と「暗」の Huck という組み合わせが原型となってすべての作品に一貫してみられたし、一個人としての人間分析も「明」、「暗」二つに分けられた。*Following The Equator* の中で Twain は “Every one is a moon, and has a dark side which he never shows to anybody.”⁸ と記したし、彼の *Notebook* では、

We laugh & laugh

Then cry & cry

Then feebler laugh

Then die⁹

という詩を書きとめて、人間の基本的「二重構造」を明らかにしている。

要するに Twain は、人間は明・暗二つの複合的存在である、との信念を貫ぬいた作家である。とくに *What Is Man?* では、この「二重構造」を最も簡潔に、かつ直截に表現しようとしてとめた。innocence を象徴する「若者」(The Young Man) と、experience を象徴する「老人」(The Old Man) とを、その明・暗両極の人物としてそこに配し、さらに、その「明」、「暗」二極を明瞭にうきたたせるために、不要と思われる一切の夾雑物をとりはらった。そこには、「老人」と「若者」の氏名、素性、性格はもとより、その容貌、体格、衣服、行動などについての説明もなければ、小説の要素として不可欠と思われる場と時についての言及すらない。それはいわば、「真空」の

中での声と声との対話、陽極と陰極との間にきらめく火花といった効果を生み出している。それも実は当然のことなのだ。というのは、そもそも始めからこの効果をねらって彼が筆をとり、この信条に照らして彼が検討を重ね、彼の意図通りに完成し、その出来ばえに満足をおぼえた作品が、*What Is Man?* であるからだ。このことはこの小説の冒頭の言葉のはしばしに容易に読みとることができる。

February, 1905. The studies for these papers were begun twenty-five or twenty-seven years ago. The papers were written seven years ago. I have examined them once or twice per year since and found them satisfactory. I have just examined them again, and am still satisfied that they speak the truth.

Every thought in them has been thought (and accepted as unassailable truth) by millions upon millions of men—and concealed, kept private. Why did they not speak out? Because they dreaded (and could not bear) the disapproval of the people around them. Why have not I published? The same reason has restrained me, I think. I can find no other.¹⁰

ただ、この小説で十分注意しなければならないのは、一見、「明」より「暗」の方が強くうちだされているようでありながら、実は Twain の真の強調は常に「明」の方におかれている点である。なるほど、表面的には、“the human being is merely a machine, and nothing more” (125) なる “infernal theory” が主軸となり、“Diligently train your ideals upward and still upward toward a summit” (173) といった明るい “gospel” をほとんど圧倒した形で展開しているし、また、その対話の本流も、その暗い人間観の持ち主、「老人」側にあって、明るい夢想者「若者」は終始「承わり役」にまわって、「老人」に執拗にくいさがる場面すら少ない。しかし、ここで

見落してならない重要な点は、この対話のしめくくりの所で、「老人」はみずからの説得力の無さを告白することによって、「悪魔」の弁という印象をうすめ、人間界へ贈る “cheerful” な “gospel” という余韻をことさらただよわせていることである。

... Am I stating facts? You know I am. Is the human race cheerful? You know it is. Considering what it can stand, and be happy, you do me too much honor when you think that I can place before it a system of plain cold facts that can take the cheerfulness out of it. Nothing can do that. Everything has been tried. Without success. I beg you not to be troubled. (214)

つまり、この言葉は人間の冷い “facts” をえぐり出しつつも、人間の底ぬけの明るさ、“cheerfulness” をどうすることもできないという「老人」の断念の言葉である。これはとりもなおさず、この小説における「老人」の二重の性格、「ジキルとハイド」的の二面性を示すものである。すなわち、この「老人」は一方では、“Man is a machine, made up of many mechanisms” (205)と毒づく「悪魔」という役割を演じ、他方では、“You’ve been shut up here quite long enough. I’ll do the handsome thing, by you, now—I’ll show you something creditable to your race”¹¹ という “gospel” を伝える「救済者」の役割りを果していると言えるからである。

3

晩年の Twain を活力溢れる人類救済の士としてとらえ、*What Is Man?* を人間攻撃ではなく “God” 批判の書とみる観点に立って始めて、Dreiser のいわゆる “enigma” としての Twain の面が明らかになってくる。従来、*What Is Man?* に盛られる Twain の人間機械論がそのまま、人間＝機械という単純な等式で、うけとられてきたものが、この観点に立って見直すと、

その「機械」とは “God” による人間の非人間化の産物で、Twain のいわゆる “manhood” なる真の「人間」を意味するものでないことが明らかになる。つまり、*What Is Man?* なる題名の “Man” とは、キリスト教文明が人間におし着せた “clothes”，いわば「囚人服」である。この並外れた “Man” 定義は、すでに *A Connecticut Yankee* の中に、その前触লেরにみることができる。十九世紀ヤンキーである Hank Morgan が中世英国のカトリック教圧制下で眼のあたりにした人間が漸次人間でなくなっていく過程が先ず、*“In two or three little centuries it (the Church) has converted a nation of men to a nation of worms.”*¹² とか、*“a man isn't ever a man, he is only part of a man, he can't ever get his full growth.”*¹³ などという風に描かれ、そして拳句は、「衣裳」が人間となり、人間は「無」に化すことを次のように述べている。

... what would a man be—what would any man be—without his clothes? As soon as one stops and thinks over that proposition, one realizes that without his clothes a man would be nothing at all; that the clothes do not merely make the man, the clothes *are* the man; that without them he is a cipher, a vacancy, a nobody, a nothing.¹⁴

この「衣裳」が人間をつくるだけにとどまらないで、遂には「衣裳」が人間となるという考え方が、*What Is Man?* ではさらに押し進められ、練りあげられて出来たのが、その人間機械論であるといってさしつかえない。

What Is Man? の人間機械論は、「内」と「外」の「二重構造」の観点から論が展開する。「内」が「外」からの力の介入を受け、作用され、破壊され、果ては「外」だけの存在になり変るといふ「内」喪失の論にほかならない。本来、本体であるべき「内」が、その「衣裳」にしかすぎない「外」にいつの間にか圧殺され、遂には「外」が本体となるという本末顛倒を發きたてる

意図をもつものである。この論を最も正確に簡潔に具象できるものとして Twain は「原鉱石」(the original rock) が「外なる力」(outside influence) をさまざまにうけて、果ては「機械」(the machine) になり変るという生成図をもちだした。

Twain の「原鉱石」論での人間を鉄にたとえるという比喻は彼の場合とくに目新しいものではない。たとえば、*Roughing It* の中で、“mica” と “gold” との見分けがつきにくいことにふれ、“I still go on underrating men of gold and glorifying men of mica.”¹⁵ と告白する箇所もあるからである。ただ *What Is Man?* では一般的な人間を鉄にたとえ、その発生と変質の跡を Twain 一流の見方でたどっていく。

The original rock contained the stuff of which the steel one was built—but along with it a lot of sulphur and stone and other obstructing inborn heredities, brought down from the old geologic ages. Prejudices which nothing within the rock itself had either power to remove. . . . Prejudices which must be removed by *outside influences* or not at all. . . . The iron's prejudices against ridding itself of the cumbering rock. To make it more exact, the iron's absolute *indifference* as to whether the rock be removed or not. Then comes the *outside influence* and grinds the rock to powder and sets the ore free. The iron in the ore is still captive. An *outside influence* smelts it free of the clogging ore. The iron is emancipated iron, now, but indifferent to further progress. An *outside influence* beguiles it into the Bessemer furnace and refines it into steel of the first quality. It is educated, now—its training is complete. And it has reached its limits. (127)

この限られた説明語の中にも、これが人間発生の parable であることが、そ

の人格的言葉遣いにより歴然としているが、なかでも “inborn heredities,” “captive,” “emancipated,” “training” などの言葉は注目に値するだろう。というのは、これらをただつなぎ合わせるだけでも、Twain の人間発生についての考え方の輪廓がうかんでくるからである。この経過をへて人間は次のような machine に最終的に変容するという。

Man the machine—man, the impersonal engine. Whatsoever a man is, is due to his *make*, and to the *influences* brought to bear upon it by his heredities, his habitat, his associations. He is moved, directed, COMMANDED, by *exterior* influences—solely. He *originates* nothing, himself—not even an opinion, not even a thought. (128)

この「人間機械」は、ここに説明されるように、自らの意見、自らの考えをつくりだす力をもたず、ただ、その「作り」(*make*) と、「外なる力」(*exterior influence*) によって動かされる存在にしかすぎない。この過程はわかり易く captive iron → emancipated iron → steel → machine の図式で表わされる。しかし、この図式でとくに注意を要することは、この “emancipated” にこめた Twain の真意である。つまり、「解放」とは全く逆の意味を読者に気づかせるために Twain は、この「原鉱石」論の直ぐ後に A Little Story なる寓話をおいている。これは「外なる力」による改宗の話で、「外なる力」を象徴する他国者が、キリスト教徒の家庭を訪れ、captive iron に相当するある死に瀕した少年を救うつもりで異教徒に改宗させるが、それが仇となり、永遠に救われることのない死、つまり machine にしてしまうというものである。さらに興味を惹くのは、これと全く逆の話、つまり、異教徒の家庭で、死に瀕した異教徒の少年をキリスト教徒に改宗し、同じ死の machine の悲劇をなめさせる話を故意に並べ、これら「瀕死の少年」によって象徴される人間を救済する道は、キリスト教などの「外なる力」を一切加えず、そのまま自力に任せることだとさとしてしていることである。この寓話によって明らか

なように、先の図式 captive iron → emancipated iron → steel → machine は、「解放」の方向ではなく、「束縛」の方向、つまり、非人間化の方向、人間性剥奪の過程を示すものである。

この「内」なる人間と、それを死の運命に導く「外なる力」という二重構造を training の視点から、次のように言い表わす。

... you said training was *everything*. I corrected you, and said “training and another thing.” That other thing is *temperament*—that is, the disposition you were born with. *You can't eradicate your disposition nor any rag of it*—you can only put a pressure on it and keep it down and quiet. (168)

この人間＝training＋*temperament* をさらに conscience の面から表現し、人間＝conscience＋inborn nature だというのである。この conscience 論はこの作品以外のところでもよく出くわすが、この小説を Twain が着手した時期とほとんど同時期の 1897 年 1 月 7 日より 1898 年 8 月 23 日までに彼が走り書きした *Notebook* (#32, I) の次の一文がその理解の助けとなる。それは、“London—Last Sunday I struck upon a new ‘solution’ of a haunting mystery.” という前置きの、言葉に始まる、次のような「二重構造」論である。

I have underscored “conscience of its own,” when I made my conscience my other person, & independent, with its own (original) character, it was a mistake. My conscience is a part of *me*. It is a mere (function) machine, like my heart—but moral, not physical; & being moral, is *teachable*, (and) its action modifiable. It is merely a thing; the creature of training; it is whatever one's mother & Bible & comrades & laws and system of government & habitat & heredities have made it. It is not a separate person,

it has no originality, no independence. (? no character—it is merely a thermometer)

つまり、これは、人間＝modifiable conscience+me という「二重構造」を示している。

以上で明らかになったように、*What Is Man?* の「人間機械論」とは、人間を封殺する「外なる力」論にほかならず、人間は「無」であるという基本的考えから生まれ、発展させられたものである。

4

さて、ここまで見落してはならないひとつの重要な点をそのままに論を進めてきた。それは、人間が「無」である、という Twain の基本思想が、*What Is Man?* の前と後とで多少食い違いをみせているという点である。つまり、その前部分は、先にみてきたように、「外なる力」の介入による「内」なるものの「無」への転落という面にその強調をおいたものが、その後部分、3章以後は、人間がむしろ進んで「無」を志向していくという姿勢がみられる。このずれは、他の変化、すなわち、その前部では、攻撃の対象として、“training,” “conscience,” “self-sacrifice,” “exterior influences,” “Religion” などがあげられているのに対して、その後部では、“God” の名がはっきりともちだされ、“God” の人間に対する責任、とりわけ、人間を機械に変えた重大な責任を追求するということと符合している。さらにまた、このずれは、また別の変化、前でみられなかった“Soul”という言葉が、後の部分で見出せるということと符合する。

このことは、*What Is Man?* を理解する上で極めて重要である。つまり、これは、それまでの「二重構造」で暗示された一人間を構成する二つの self という考え方が飛躍的に進んで、三つの self の考え方に変わっていることを示すからである。言い替えれば、これは machine と化した二つの self の

殻からの脱出、雄飛である。この Twain の “Soul” への到達は、*Following The Equator* の中の “Be careless in your dress if you must, but keep a tidy soul.” という言葉によってほめかされ、*What Is Man?* とほぼ同時期に書かれた No. 44, *The Mysterious Stranger* の中にはっきりと次のように示されている。

Each human beings not merely two independent entities, but three —the Waking-Self, the Dream-Self, and the Soul. This last is immortal, the others are functioned by the brains and the nerves, and physical and mortal. . . .

この “Soul” の世界とは、一切の「外なる力」から干渉されることのない、完全な自由の極致である。とりわけ、この “Soul” とは、“God” から完全に解放され、そのなんらの制約も受けることのない完全な唯我の存在である。

こうみえてくると、この「無」志向、“Soul” 認識は、「二重構造」の人間レベルでの reverence の姿勢から、irreverence の姿勢への転向といえるし、二つの self の時の “loyalty to God” から、“disloyalty to God” への移行だといえる。*Those Extraordinary Twins* をここにもちだすならば、敬虔なキリスト教徒の書物、*Whole Duty of Man* を愛読する Angelo と、キリスト教批判の書、T. Paine の *Age of Reason* を耽読する Luigi という *Those Extraordinary Twins* の争いの段階から、time, space, “God” のすべての制約から解放され、唯我の境地にある “Soul” の世界への飛躍である。さらにこれを言い替えることが許されるならば、それは、“loyalty to the general idols and fetishes” のレベルから、“loyalty to one’s best self and principles” への転向である。ここまで、この重大な転向について言葉をつみかさねてくると、いかにこの転向が God に対しての明白な反逆であり、実に辛埒な God 否定の態度であるか、明らかであろう。この余りといえは余りの irreverence の故に、Twain は、*What Is Man?* の稿を練

りながら、彼のノートに、“I am writing from the grave. On these terms only can a man be approximately frank. He cannot be straightly and unqualifiedly frank either in the grave or out of it.”¹⁹ と書きこまなければならなかったし、また *What Is Man?* の前置きにも、“Why did they not speak out? Because they dreaded (could not bear) the disapproval of the people around them.” (124) とわざわざ断り書きをしなければならなかったのである。

さて、それでは一体、この重大な Twain の転機はどこから由来してきたのであろうか？ Tom H. Towers が言うように、当時の先進キリスト教諸国をとりまいた “hateful reality” に帰するのは簡単だが、それよりも重要な原因は、Twain が人間の真の identity を追求しつづけ、最後にゆきついた結論が、“God” 否定であり、Adam 志向であったと私は考えるのである。Allison Ensor の *Mark Twain & The Bible* によれば、Twain は晩年、とりわけ Adam に深い関心を寄せたという。Twain の晩年に書かれたノート・ブック、日記などに頻繁に Adam への言及があるし、作品にもよくとり入れられ、*Adam's Diary* と題する短篇まで書いていることがそのなよりの証拠となる。ところで Twain の Adam 観の特徴は、“disloyalty to God” の祖としての Adam によせる高い評価である。*What Is Man?* にその典型的なものを見出すことができる。

Adam is quite big enough: let us not try to make a god of him. None but gods have ever had a thought which did not come from the outside.

Adam probably had a good head, but it was of no sort of use to him until it was filled up *from the outside*. He was not able to invent the triflingest little thing with it. He had not a shadow of a notion of the difference between good and evil—he had to

get the idea *from the outside*. Neither he nor Eve was able to originate the idea that it was immodest to go naked: the knowledge came in with the apple *from the outside*. A man's brain is so constructed that *it can originate nothing whatever*. It can only use material obtained *outside*. It is merely a machine; and it works automatically, not by will power. *It has no command over itself, its owner has no command over it.* (129-130)

ここで注目しなければならないのは、Adam を “big” だと判定する Twain 一流の基準のたて方に “disloyalty to God” が明確にうきぼりされていることに注目する必要がある。Adam が “big” である所以は、Adam の樂園追放前にあるのでもなければ、Adam の樂園追放後にあるのでもない。それは、Adam が God に反逆した瞬間にあると Twain は考えた。

It was not that Adam ate the apple for the apple's sake, but because it was forbidden. . . .²⁰

「生」を象徴する “apple” のもつ魅力のために Adam はその “apple” を食べたのではなく、Adam 自身が本来的にそなえた God への反逆精神、disloyalty にしたがって食べたというのである。これは言い替えば、God の律令に遵って「生」を全うすることをのぞまず、God に反逆し、God の贈りものである「生」を拒否すると言う反骨精神である。“Pudd'nhead Wilson's Calendar” に、このことを裏づける次の言葉がある。

Whoever has lived long enough to find out what life is, knows how deep a debt of gratitude we owe to Adam, the first benefactor of our race. He brought death into the world.²¹

この「死」導入者として Adam を “the first benefactor of our race” だとする Twain の論拠はもはや明確である。真の「生」は「死」から生まれ

るという Twain のいわゆる “lifeless life” の考え方に由来している。これは Twain の despair を示すものでもなければ、pessimism の傾向を裏づけるものでもない。次の引用に感じとられる独特な屈託のなさが、なによりもこのことを証明しているといえよう。

... death was sweet, death was gentle, death was kind; death healed the bruised spirit and the broken heart, and gave them rest and forgetfulness; death was man's best friend; when man could endure life no longer, death came and set him free.²²

この「死」を「死」として恐れない活力, “the creator & protector of human liberty” としての disloyalty 礼賛を打ち出す大胆さ, これこそアメリカの真の国民作家 Twain 自身の identity であり, 大きくアメリカ人全体の identity なのだ。 *What Is Man?* と時を同じくして書かれた Twain の *Notebook* に次の言葉がある。

We are called the Inventive Nation—but other nations invent. And we are called the Bragging Nation—but other nations brag. And we are called the Energetic Nation—but there are other energetic nations. It is only in uncourteousness, incivility, impoliteness, that we stand alone—until hell shall be heard from.²³

注

- 1 B. DeVoto(ed.), *Mark Twain In Eruption* (New York: Carricon Book, 1968), p. xix.
- 2 T. Dreiser, “Mark The Double Twain,” *The English Journal* (vol. XXIV, No. 8, 1935)p. 615.
- 3 *ibid.* p. 619.
- 4 J. S. Tuckey, “Mark Twain's Later Dialogue: The ‘Me’ and the Machine,” *American Literature* (XLI, January, 1970), p. 532.

- 5 *ibid.*, p. 534.
- 6 M. Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Harper & Brothers, 1906), p. 15.
- 7 M. Twain, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (Harper & Brothers, 1906), p. 234.
- 8 M. Twain, *Following The Equator* (Harper & Brothers, 1906), II, p. 350.
- 9 *Mark Twain Papers*, #32, b, II.
- 10 Paul Baender (ed.), *What Is Man?* (Berkeley: U. C. Press, 1973), p. 124. 以後、本書からの引用は、各引用文の文末の括弧内に頁数のみを記す。
- 11 W. M. Gibson (ed.), *Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts* (Berkeley: U. C. Press, 1967), p. 321.
- 12 Hamlin Hill (ed.), *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (Scranton: Chandler Publishing Company, 1963), pp. 100-101.
- 13 *ibid.*, p. 294.
- 14 *ibid.*, p. 100.
- 15 Franklin R. Rogers (ed.), *Roughing It* (Berkeley: U. C. Press, 1972), p. 197.
- 16 *Mark Twain Papers*, #102a.
- 17 *ibid.*, #321.
- 18 A. B. Paine (ed.), *Mark Twain's Notebook* (New York, 1935), p. 199.
- 19 A. B. Paine (ed.), *Mark Twain's Autobiography* (Harper & Brothers, 1924), p. 305.
- 20 A. B. Paine(ed.), *Mark Twain's Notebook*, p. 275.
- 21 M. Twain, *Pudd'nhead Wilson and The Extraordinary Twins*, p. 30.
- 22 Hamlin Hill, *Mark Twain: God's Fool* (New York: Harper & Row, 1973), p. 248.
- 23 *Mark Twain Papers*, #30, II.

Synopsis

Adam and "God" in Mark Twain's *What Is Man?*

Yorimasa Nasu

Bernard DeVoto once recognized "a new Mark Twain, the author of *What Is Man?* and *The Mysterious Stranger* as easily discriminated from "the Mark Twain who had had a coherent development up to *A Connecticut Yankee*." But there has been a lingering question that DeVoto might have focused far more on the writer's biographical events in his late years and the chaotic and turbulent times he lived in than on all his works, letters and notebooks. Recently published materials of Twain, especially the publication of *Mark Twain Papers*, have enabled us to discover a plain consistency between *What Is Man?* and other earlier writings of Twain's.

In all his literary works, Twain is consistently concerned in a quest for the identity of man, that of Americans in particular. He believed, "Every man is a suffering-machine and a happiness-machine combined. The two functions work together harmoniously, with a fine and delicate precision on the give-and-take principle," but "sometimes a man's make and disposition are such that his misery-machinery is able to do nearly all the business. Such a man goes through life almost ignorant of what happiness is." Twain's main concern in *What Is Man?* is to bring the "happiness-machine" to life, and to degrade the "suffering machine" from its dominant position. This novel, though it has often been considered a book of Twain's hopeless resignation, is Twain's "Testament,"

concerned with what man's happiness is.

The Old Man who has predominated over the Young Man all through the dialogue of this novel is an angel whose duty is to inculcate disloyalty, as shown by Twain's words, "The first thing to teach is disloyalty, till they get used to disusing the word *Loyalty* as representing a virtue." The Old Man tries to remake the Young Man into a being without conscience by opening his eyes to the transitoriness of God's *eternal* order. In the course of their dialogue there is seen a shift of emphasis from "the damned human race" to God's responsibility for making a machine of man. The Old Man denounces God as the maker and driver of the "suffering-machine" in man, saying: "Who devised the blood? Who devised the wonderful machinery which automatically drives its renewing and refreshing streams through the body, day and night, without assistance or advice from the man? Who devised the man's mind, whose machinery works automatically, interests itself in what it pleases, regardless of his will or desire, labors all night when it likes, deaf to his appeals for mercy? God devised all these things. I have not made man a machine, God made him a machine."

That shift of emphasis in *What Is Man?* represents the change of Twain's concept of man from duality to trinity. The early part of this novel describes man as a being of two entities combined, for example, that of *temperament* and training, that of human nature and "outside influences", that of "inborn nature" and conscience, and so on. The latter part of the novel, however, presents a third, "the Soul" that is immortal and emancipated from all the bonds of flesh—time, space and God. "The Soul," in the Old Man's sense, is an incarnation of complete freedom and independence—the fulfillment of what the Old Man teaches

the Young Man : "Diligently train your ideals upward and still upward toward a summit." The recognition of "the Soul" in man reflects the reestimation of Adam as the first rebel against God. Thus, *What Is Man?* is a "gospel" which Twain gives to the human race: "Mankind! Return to Adam!"